



天文古四年八月十五日

地知氏書冊



何船 一

徳人の年の花つじ若菜川菘
神を重くしと松乃高き是を
おまらるる山の里と春のさき
わらわら夜又のさきと知く已
ふりて月を照らす野とをを
なると換くを身なり中なる
病や折葉のまわりのあま
るのまを折乃露のしきり
身りふふわし汁けしんて
時中へ折りてまゝ名を
おまらるる破山のあま
夕日乃をらのまゝるね

鏡の考は先づこの世を
朽腐るものやまはつ訓
昔も今も中の一と云ふは
多うて母のや又まゝの
知らばとわりのけりて
伊州のたけりしは
月がしむるも
海に心も
わらわの
菊堂
此の
か
け
後
あ
橋
た
し
か
し
月
中
新
此
し
早
契
二

四つに四つふふ家のうへに
りまのうへに成るひげきしを
なすよそへてふふふふふふふ
なふふふふふふふふふふふ

酒何き

文後のうへに成る井さなまき巴
りしに輝きつるまきしにまき
新月しを露とるぬあつて
野にうへに成るつるふふふ
夜持あつてふふふふふふふ
山にうへに成るつるふふふ
かろろろろろろろろろろろ
水のふふふふふふふふふ
とあつて田代山田のうへに

三つにうへに成るの枝より
おろろろろろろろろろろろ
月をうへに成るつるふふふ
けろろろろろろろろろろろ
とあつてのうへに成るつる
今つてのうへに成るつる
おろろろろろろろろろろろ
積りし物と又年方すま
たつてのうへに成るつる
おろろろろろろろろろろろ
子ねろろろろろろろろろろ
まろろろろろろろろろろろ
なろろろろろろろろろろろ
まろろろろろろろろろろろ
あろろろろろろろろろろろ
とつてのうへに成るつる

子音とら小田乃あめ縄山からて流
すもと流るれ水のりさるれり巴
流とそあふくくあじしし 養
うらうくくすんるせ年 全
候りうもひふしあひじいせにく巴
い流るれとら流りさるれを
あひのあふあふとあふく神意養
らりうく好む信者なる岸 全
えきげやのあふのねあふむむに疑
あふ神らんとなうくあひ年巴
新月うれあふ明のわふ流を山養
ひく白うく那ゆく郭 公取
まらうくうくうくいさひり物るむを
みあらししんすあふあふうの養
い流るれいほはのあふ成のうを
そふの小川をさるるあふあふ養

風とられ行雲山のりさるれ巴
みあふくく流るあふあふのふ福
花のあふあふられあふあふれ巴
あふはあふすこの志とそく川養
けあ流るあふと柳乃あふうくを
うらういけり野うくあふあふあふ
流るく将陽乃すあふ神今さるを
山あふくくく信者いあふくりり養
月あふく流るあふあふあふあふ
このあふあふあふけくあふ長あふ巴
いしりあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ

久留れささむらへきふ外
二子名のせしし心のま
宿のひの時毎の梅の只言て
つづく月乃をさつりて
夏乃夜を祈りて
すれ終るまふ子泣き
わらわらるるを川の
ちまらふ本を
守程の細代
若のつてこの
侍の考き
そ乃の
明も
るま
殊く

まのつて
こ
う
ま
や
む
ら
野
藤
け
ひ
物
毎
七
な
ま

うららのやうな夕あき、はげたり業
うららの心とまは心のうららそと死を
計らうららしにをくらせとくゆく飛
んあうらら乃あうららとれははわ業
ふすけけとあつる閑伽棚乃水巴
わららとんをせうらら若乃存瓶
塵をらあうらら年と回ら業青
いはらららと流うららるははと
多長をららら乃をけを藤系を

青何すハ

月名船夕多習わらら秋の梅巴
みをうららたけけく存のうらら元瓶
ひららららと又存瓶をふららと業
うらららのすあわすあゆららんを

まけけとくはあまらに水は瓶
かりせあやとく青すしはまて巴
行方の種とんを續く瓶を
たうらららとく水のすしと業
うららららとくあうららはは柳巴
業をさうららははあのうらら色瓶
風とくも業あうららはは瓶を業
霞うららとくははあまらうらら
をらあ子とらりけけとくをらら
あまらとくははあまらけけとく巴
取らとらりけけとくはは瓶を業
はらとくはは月とくはは瓶を業
小瓶乃は瓶乃のうららららとく巴
再とくははとくははとくはは瓶
確とくははとくははとくはは瓶

を希しくぬぬのふら乃の安を
九を沈出所り新らつらひて類
いし海行のくくあつて思く類
人海の流を川が流るに流るを
ふあすを夕流るを乃一考ら已
世入る岩ののわき来りてを
ああらののくを踏み山田類
か人言世らつやや一を乃るを
ほらくく丹くくせてくくまを
くはくくくくくくくくくく
人いりちより流るし思りすり已
そよの先くくくくくくくく
伊あうくくくくくくくくく
死るくくくくくくくくく
訓わらぬくくくくくくくく

まらし秋ししをくくくくく
あはゆ此山とくくくくく
目けりまをわくくくくく
くわらるる早もくくくく
くくくくくくくくく

玉何一才九

あやせせせせせせせせ
思乃昔もあきくくくく
あは福のくくくくく
枯小すくくくくく
くく浪のくくくくく
あまき下すくくくく
あまき下すくくくく

後言ふ事は子の母の多病り已
橋とさしおやむおれ人素
うらふひく神柳はかたて巴
けらうらる燈とあそぬ東山よ今
おそに流るるさくさく飲丹敷銀
音りしはししくも毎すしと巴
山田もなりくもささひわさうり今
賤うすむいのみと川原をてて銀
すもくもあさしとぬ乃山くもを
ほのりたる燈やあそぬぬを巴
音らむしひの燈らあそぬぬを
伴はる世にんぬぬぬ下はるる銀
おそに流るるさくさく飲丹敷銀

何船 追加

初言ふ事は子の母の多病り已
橋とさしおやむおれ人素
うらふひく神柳はかたて巴
けらうらる燈とあそぬ東山よ今
おそに流るるさくさく飲丹敷銀
音りしはししくも毎すしと巴
山田もなりくもささひわさうり今
賤うすむいのみと川原をてて銀
すもくもあさしとぬ乃山くもを
ほのりたる燈やあそぬぬを巴
音らむしひの燈らあそぬぬを
伴はる世にんぬぬぬ下はるる銀
おそに流るるさくさく飲丹敷銀

其の世を伝へて今も教
白す事ありしはるるるる

いづくの信と名一垣本に記す
くはひの 其のひらきうた

何と御世指し
月乃に如る御人

神新くくても程くく流乃

夜上座より宵に猶書

村毎乃のくらぬ軍も取らる

櫛もあははしく田よの山

流とせきハ測とくく心本を芥

株乃り枝の町らゆら

おひぢ乃る流手取くくわをまぬ

昔も流と神にけり

胸に焼たてくくゆひり

室乃の流のけき乃程書

徳よ出る岩中流風あまいたるく

神と也くくく

足流のくくくくく流橋よ

程をねくくくくく

流の世とくくくくく

石山あはれ寺とくく

銀巴は流

至波おんくくくくく

多の世は神乃多

ひりくくくくく

はは流乃くく言のぬ

俄くくくくく

ははくくくくく

くくくくく

流くくくくく

石室の淵乃聖子と云はれしらん

ひらら栢の松風を吹

了もつれなきに契る乃ちくくは流れるや

月も文の秋風のそと

白ひつらそをそ力局とていふや

月入ちちこくすわ

葉の上に並るる露乃白玉と

くく汁れぬ乃ちそ露

空よととわけてるゆれをそく秋

月こくくくをそくく

結らんく引けまの秋涼さ

石室の座に流れる露

空屋もしくつまわくそ神乃そ

おまこくくおね乃心

ちくくくそ流のそと秋のそ

石室乃秋の松葉松葉

室のそれ噴湯されこそひふ

ねく流るそあつる長秋の友

ほのそらゆゆの夜乃そ音乃そ

行神をそそせそれも橋

りくくく入り下のそくねるや

おま乃真の松乃夕波

津のそ乃難所のそれ流る水も

ねくく流の月れれそ

留題浩月江山一覽之簪簪下

月明浩々夜沈々去此晴光何

處柔不換三公子陵瀨江山一覽主

人心

金后有尊和

浩月水流昇又沈江山一覽不
勞尋秋霄對榻共閑話塵外
相逢世外心

去年の秋乃以津武相續乃事

たしとあさしうき物流しては海干露

石山寺少く彼或部が共毒をそ

肯れ事お祝さうし流つてあま

海取ある事あまの月又作らるる

して既おひまは法樂乃くお後名

号とよまはるるあまの首の字をほ

しつたはららるる事ありては

くはららるる事ありては

つたはららるる事ありては

しつたはららるる事ありては

て逢屋よりけりては

足と体あはれしうしうしうし
君はくふ世世世世世世世世
知人あそくをくくくくくく
えくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
あつたにきん坊くくくく
そのあつたくくくくくく
孔子の神母乃里く車と海
高祖を拍くくくくくく
多あしあまはば業まら田業
清の存くくくくくくく
ま入んゆくくくくくく

湖好あまの福くくくくく
類あは浩月とあり又下休
津山つ後を懸せし一
津山乃京氣あまの系をく
後善園押改乃月く山風
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

おくりし書と全法は清沙法
のしるしありては成り
本寺の坊主は法勝中興
のちのしるしにありては
わがらふれりありては百額に
ありてはありては観音あり
理文仍業の法書ありては
人のまじりてはありては
取とありては名月らに年
ありてはありては三層に
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては

正三船より還向しゆる毎年の
自給にありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては
ありてはありてはありては

天都等江心社為同社克海
有和答

洛城之東中餘里程而有寺
曰石山通如三息輪觀音堅坐之
其傷之學禱不應乞願不成
矣繇是技柔六十六尺于緇于
素無貴世賤或肥馬輕裘或
蹇駝帽風透雨往雪昔霜辛
詣之者如歸市矣其絕境也
年高於顛材一尺半丈之山勢
其花堂也怪影於太湖三五六
千頃之波心吾邦三十三所之淨
刹此山為之最雅云梅峯化境

弗多讓寫一貯憾予聞其名而不
遊其境矣一从同昔紫雲部懇
祈有感而作原由五十四帖丁三五
佳辰而始筆於頤磨之卷矣
吁紫雲部即白衣大士也白衣之
大士即紫雲部也他馬部婦之
流亞乎今茲天文七卯槐之中
大覺門主携乃標名尊公羽味
詣之宗艱紹巴從持鳥遂連
倭勺者一千山歌浦詠玉唱金
歌妙語志人清冷消俗放翁

所謂聯句敏如山吐月者五日而
 終章矣此山中有舍坊生有
 二亭一編江上一覽一勝江月
 紫野一休禪先一野書也維時坐
 浩月亭嘗與中秋節專翁賦
 唐律門主屬和一時勝集也
 後數日門主散予龜阜笏
 室而閑話及此佳作予吟
 既不復口漫獲年吟讀者一三言一奉一投贈
 玉床下以索吟擲云

清話同床到漏沈忘年交友鎮相尋

倦飛水月觀音境朝洗人心慕照心

嵐齋野釋兼董拜和

△右家文一內
 如世朱入一而有之

右石山子向持主當節大塚氏
 今一覽之書字本以紙冊七十
 七枚之書河紹巴其筆也

千載和歌集序

千載和歌集序

やほしんしり内弁いちちるやゆり
神代よりしりまらまてろろのこれ
ろよああをより後まろり此
平のちやこりくくは延長乃ひり
乃神世より古久。集とあまこま
云唐乃しり此れおむし時り
後撰集とあひのめまひ白河の
世より後拾遺集。初より堀河
乃先帝のちりまらこりてまら
乃先帝のちりまらこりてまら
我世乃風俗しりまらこりてまら
とそあまのちりまらこりてまら
とそあまのちりまらこりてまら

二十六年秋

柿本丸

寶貝畏く去明衣能
有る能乃胡霧余
志未雅久禮行
不念遠之新鬼

紀貫之

舛

くくらち
木の丸風
さむら

ろくろにしろくろれぬ
雪あかりけふ

凡河内行植

わら富

ちを

のま

ちを

み

坂

雁

そ

高

く

夫

人

夢

伴哲

三
の
わ

き

ぬ

心

山
い
た

約

あ

や

み
ひ

は

心

中納言家持

梓
木
若
く
物
立
小

峰
農
秋
弟
子
尔

玉跡見たりと
有白鳥

山迄赤人

和え

いかに

あ

想

子

し

こ

みち

これ

響

直片

鳴

了

系

あ

を

こ

五原る末乎胡臣

よれりり

ささめたり

のらり

乃

僧正通昭

末れ

あ

辛や世中の

正々れ
出んつ法

たり
ち〜ま

系性法師

辰
今の母や

の月子家一

約は家の長月の
子は家の

紀友則

友
てち〜ま

孫子まれま

山ほのうちら

ち〜
のうちまを
り

猿丸大夫

於久山小黄系
證分鳴若菘

聲一岡村方高者
忠一筆

小野小町

色みこして

流
うはりよ

髪
そのは

与子眼の

心とれ
心儀

中納言道徳

心とれ親の心

やうにあふれ
やう

子をおりよ道小

子とれぬる

中納言胡志

道

心とれ

才成

心

縁に

心とれ

あらくは
たうは
人をま

積中細き敦忠

あいにいれ
もの

のち浪
松

こころ
ま

うら

あは
む

藤原高文

か
くはのま

強

みゆれ

あ
ふ

う
や

くもはら

月

源公忠胡

世

山ち

ほろろまは
いふ死らるる名の

あゝ海舟した

壬生忠岑

あゝまゝ
つて

子
いふま

しや

みしや

いふま

いふま
いふま
いふま

東宮女御

いふま
いふま

いふま
いふま

結
いふま

岩の
松風

いふま
いふま

いふま
いふま

大仲臣頼基朝臣

いふま
いふま

いふま
いふま

こころ字

引つれ

うづれ

山路

考
か

源宗之御注

かみ

たふ

ひ

の

さ

う

これ

あ

う

源宗之

の山

の

い

の

あ

藤原殿の御筆

秋葉如く

さ

風のそとにそ
松くらりれ
ぬれ

源信明物事

高きは

ねあしは

あしは

と夜の日字

大しきら

源清正

子日あはし

はのれむ

こすひ

やらむ

をすは

源順

こすひ

はのれむ

水の杉

あし

明月ふ

かすは

涼原貞風

旅を可也

志は人

ふ
れ

せむ

言はれ

友
れ
ふ
れ

涼原之猶

秋のしれ旅乃

ふ
れ
華
字
に

若のひつら

う
れ
れ

坂と名

ふ
れ
無
成

山の

れ
零

は
れ
れ
れ

涼原之志

夏子の良し

さきまにうれ

玉輝れ

道行人も

あまのこも

十六夜

岩橋の

あまのこ

あまのこ

あまのこ

契も絶

あまのこ

あまのこ

有原仲文

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

大中臣経宣朝臣

あまのこ

あまのこ

あまのこ

清浄上品。

悲しく下代

平孫守

土生忠見

か
き
あけ

きしんじ

ら
の
子

平之盛

を
季

か
あ
れ

き

と
ま

わ
か
り

は
ら
い

く
月
字

甲
子
ら

中務

う
くひ
春
あ
る
夏
子

く
あ
れ

う
ま

山
生
せ
ん
ま
を

い
く
ま
ぬ

倣法中探函東筆之

松觀山



右文仙一筆之

人の
あ
く
ま
ぬ

其
ま
ま
な
り
の
ま
ま

文韻雖厚然其人亡則其迹之
可以視焉其迹之可以視者無若夫
畫之野間也往日橫井一齋國子典

余
祖考愚鈍文韻嘗厚於是書

六々歌仙以贈之而之皆沒世其
年嗣子天孫之生持彼書軸來請

題一言於楮端也披之則猶視
舊文於今日其迹歷然焉其
先之於余詞壇之盟文誼之
厚亦於之視昔矣故不能
辭其請漫題一言云爾

天保十有一年歲次庚子嘉禾月

燕定解為山地志

謹誌

古言款價

~~燕定解為山地志~~
~~燕定解為山地志~~
~~燕定解為山地志~~
~~燕定解為山地志~~

~~燕定解為山地志~~

